

# 酪農業を営む

# 看護師の取り組み

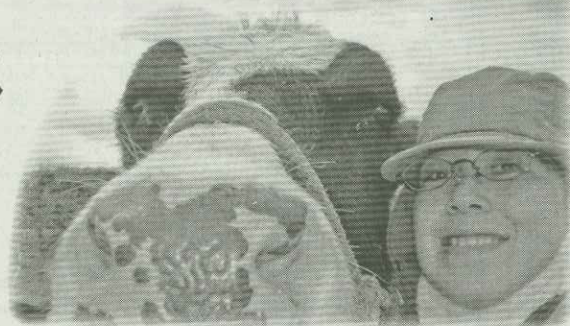
＝Think Globally, Act Locally＝

地球的規模のレベルで考えて、地域レベルで行動しよう

全国訪問ボランティアナースの会

「キャンパス釧路」竹内 美妃 代表

（国際緊急援助隊医療チーム登録  
看護師・酪農家 竹内牧場代表）



連載10 海外災害支援活動に参加して

私の最初の出動は、2004年12月に起きたインドネシアスマトラ沖大地震・津波被害に対する緊急医療支援活動でした。12月26日に起き、被害のあったタイ、スリランカ、モルディブといった地域へ医療チームが次々と派遣されていきました。私は大学の集中講義中でしたが、いつ派遣が決まっても良いように荷物をまとめ待機していました。

最終的に私は最も被害が大きかったスマトラ島のバンダアチェへ、医療チーム員として選抜されました。「看護師として必要とされているのだから頑張れ！」と、年末年始の酪農作業を快く引き受けてくれた夫の応援もあり、12月31日の大みそかに成田空港へ行き、1月1日にインドネシアへ発ちました。

この津波は20万人近い方が被害を受けた、これまでにない大災害でした。広場には遺体が積み上げられ、かろうじて難を逃れた多くの被災者の想像を絶するような訴えと怪我に、驚きの連続でした。北海道とは気温差50℃以上もある暑さの中で、活動を続けました。

この時の医療チームは、私たち1次隊に続いて2次隊、3次隊まで出動し、最終的には自衛隊部隊に引き継がれ、自衛隊は治安の関係上、フル装備された大きな自衛隊の船でスマトラ沖に停泊しながら医療支援活動をするという、日本政府として精一杯の支援をした災害でもありました。

それからしばらくして、AMDAから突然出動要請の電話が入りました。2006年2月、フィリピンレイテ島で大規模地滑り被害が起きたのです。災害が起きたことはテレビのニュースで見ましたが、この時フィリピン政府は、国際的に他国への支援要請を行いませんでした。多国籍医師団として活動するAMDAは、政府からではなくAMDAフィリピン支部からの要請を受け、日本から医師1人、看護師である私1人と、AMDAの職員2人、AMDAインドネシア支部から2人のインドネシア人医師も加わっ

て、計6人で活動することになりました。

フィリピンでは、フィリピンでの医療免許を持たないと国内で医療活動は行えないという事情があります。しかし、今回の災害に対し、日本からの緊急支援に感謝したAMDAフィリピン支部長の医師の許可が下り、日本の医師、看護師も活動できました。

AMDAは民間組織のため、一つひとつの問題や課題に対しすべて自分たちが責任を持って手配し、考えて、判断や行動をしていかなければなりません。しかし、政府組織では体験できない、自分たち自身で試練を克服する貴重な機会となります。

被災国で活動するその国の医療チーム員や、避難所で暮らす被災した方々たちと手を取り合い、肩を抱き合いながら困って



▲フィリピンレイテ島地滑り災害支援活動で、アナハワン郡病院に収容された被災者を診察するAMDAチーム。左から2番目が筆者クリストリー高校避難所での健康診断。左端が筆者▶

（写真提供AMDA）

いることを理解し、考え、話し合う現場では、互いに相手を気遣って母国語ではないたどたどしい英語を使いながら何とかコミュニケーションを取り合い、接するところに何とも言えない人間味があり、どの国に暮らしていても人間は皆同じなのだということが、私も一地球市民なのだ、まさにこの目で、この肌で実感できる現場だと思えます。

私はAMDAという民間組織と、国際緊急援助隊という政府組織の両方の組織に属して活動してきたからこそ、それぞれに必要なとされている役割が見えたように思います。

昨年のミャンマー連邦におけるサイクロン被害に対する支援活動も含め、これまで私は3度の海外での災害支援活動に取り組んできました。災害看護と一般的な看護の違いは、活動する医療従事者たちも、被災者と同じ過酷な災害現場で生活しなくてはならない、という点にあると思います。被災地では、主に次の3つが私は大切だと感じています。

1つ目は「環境への対応」です。現場は生活環境の厳しいところなので、隊員自身の健康が維持できなくては十分な支援活動はできません。身体面はもちろん、精神的にも各自がコントロールできなくてはなりません。

2つ目は「感染症対策」です。国際緊急援助隊では、登録者は前もって予防接種を受けていくことが求められます。派遣地域には元からある風土病や季節的に流行する感染症、災害の影響

で流行する感染症など、あらゆる感染症が存在するため、それらを考慮し隊員各自が事前に予防接種を受けておくことは、危険を回避するために重要です。

そして3つ目は「チームワークの構築」です。初対面の人間同士でチームを組み、2週間の共同生活、共同活動を行います。皆で協力し合えな

ければ円滑な活動はできません。日々の日常生活で常に意識し、どのような現場であっても一番大切にしたいことだと思っています。

国際支援を目指すには、まず自分自身が日本において、自分の暮らす地域にしっかりと足をつけることが大切のように思います。「日本で役立つ活動こそが、海外でも役に立つ活動である」と言ったあるエンジニアの言葉を胸に、私は酪農業をして暮らす看護師として、酪農地域で必要とされる看護をしっかりと見つめ、海外でもその技術を惜しみなく提供できる看護師でありたいと思っています。

